

医事万華鏡

昨今、長年ひきこもりを続けた大人による犯罪を見聞きする機会が増えています。内閣府が行った調査によると、40〜64歳の中高年の内、自宅に半年以上に亘ってひきこもり状態にある人が、全国で推計61万3千人いることが明らかにになりました。もちろん、全てのひきこもりを犯罪と結びつけて考えることは問題ですが、やはりひきこもりが犯罪の温床となっている可能性については、これまでの事件を振り返ると一理はあるようです。ひきこもりを隠しつつ、その生活を支えている家族の、物理的・精神的な負担は、想像を遙かに超えていることでしょう。

もともと、一番苦しいのは当の本人なのかもしれません。彼らの多くは近親者からの虐待のみならず、学校生活に早い段階で躓き、精神疾患・問題を抱えたまま、虚しく年を重ねてしまったような大人たちです。国民の生命や財産を守ることを責務とする国家がこの状態を野放しにし続けることは、間接的にも「家族」の生命と安全を脅かし続けているようなものです。その数は仮にひきこもりの両親が存命であるならば、3倍の数の国民を苦境に陥らせたままに

しているのです。

また、大人のひきこもりには40代が多いとされています。この40代は就職氷河期世代に該当します。おそらく、彼らがひきこもりになった

きっかけの一つに就職の失敗があったと推定されますが、彼らの新卒時、国は非正規雇用を増やし始めました。終身雇用を悪とし、米国のような流動的な人材の雇用を善と見なした時の政府の方針のお陰で、辛酸を舐め続けているのがこの氷河期世代です。一方で、今の新卒は売り手市場というのですから、この不公平感は目に余るものがあります。政府は「一億総活躍社会」を目指す前に、大人のひきこもりに救いの手を差し伸べ、自立して過ごせるよう支援することの方が先のような気がします。

さて、こうした大人のひきこもりを未然に防ぐには、すでに学童期の段階で発せられたSOSを見逃さずことなく、できるだけ早期に介入することが重要であるように思います。とはいえ、目下のところ政府は、社会保障制度の維持に向けた、医療費抑制を目指し、「健康長寿社会」や「健康寿命の延伸」を謳っています。従ってその意識はおしなべて「高齢者」に向けられているようです。しかし、それと同じく未来を担う子どもたちについて思いを馳せ、子どもたちの「心の癒し」に真剣に向き合う必要もまた重要ではないでしょうか。子ども達の癒しは、成長し、いつか次世代の子どもを育てる大人の癒しに繋がっていくからです。（JMS主幹・野村元久）

